

高森大乘

一、はじめに

「法定まりて国清めり」：日蓮遺文『四信五品鈔』（『昭和定本日蓮聖人遺文』一二九頁）の一節です。

中国陳王朝の第三代帝主廢帝・第四代宣帝・後主叔宝らの皇帝たちや、随王朝の煬帝（五六九～六一八）は、天台大師智顛（五三八～五九七）を尊信して仏教を保護・奨励し、これにより天台山国清寺を中心に中国全土に法華一仏乗の思想が流布したといわれます。智顛は煬帝より「智者大師」の号を贈られました。

治安の混乱や僧尼の墮落などによって頽廢した奈良を離れ、平安京遷都を成し遂げた日本の第五〇代天皇桓武天皇（七三八～八〇六）は、抜本的な宗教政策に乗り出し、伝教大師最澄（七六七～八二二）を外護して、年分度者（天台法華宗にて得度を許される者の定員を定めた允許）の官符を下すなど、比叡山延暦寺の発展に貢献しました。晩年の最澄は、かつて奈良時代に鑑真和尚

（六八八～七六三）らによって伝えられた小乗戒の戒壇院とは異なる、法華一乗思想に基づいた大乘菩薩戒の授受を行う戒壇院を建立するため刻苦勉勵されました。その結果、最澄歿後の天長四年（八二七）に淳和天皇（七八六～八四〇）の公許を得て近江国に戒壇院が建立され、更に貞観八年（八六六）には勅して「伝教大師」と追諡されています。

かくして確立された法華一仏乗による仏法の安定が、国家に平安をもたらし、王法を繁榮させたことを述べたのが、冒頭の一節です。

日蓮聖人（一一二二～一二八二）は、『立正安国論』の上奏や度々の国家諫暁という行為にも示される通り、王法と仏法の関係に対する関心を強くもっていた人物として知られます。大正十一年（一九二二）一月三日、生誕七〇〇年を期し日蓮聖人が大正天皇より「立正大師」の諡号を宣下されてから九〇回目にあたる今月を記念し、本号より「日蓮遺文の国王たち」と

題して、印度・西域・中国・三韓・日本の国主・帝王らを、日蓮聖人がどのように理解し認識されていたかについて、ご紹介いたしたいと思います。

まずは、日蓮遺文中に登場する印度・西域の国王たちを見て参りましょう。仏典には、仏菩薩の本生譚<sup>ほんじょうたん</sup>・本事譚<sup>ほんじたん</sup>や、過去世・未来世の物語・来歴譚に至るまで、数多くの国主が登場いたしますが、本連載では、これらのうち歴史上実在したことが認められる国王・帝主を取り上げたいと思います。遺文中には、印度の前六く五世紀頃の十六大国の時代から七世紀のヴァルダナ王朝期に至るまでの六つの王朝に亘って、代表的な一七（または一六）名の国王が登場します。

なお、典拠として示した各遺文の頁数は、立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺、二〇〇〇年）の収載頁数となります。

## 二、十六王国併立時代の王

十六王国（十六大国）とは、<sup>しやくぞん</sup> 釈尊在世の前後に亘り、前六世紀頃から前五世紀頃にかけて古代印度に形成され、相互に争っていた諸国の総称です。十六大国の国名

には諸説ありますが、『長阿含経』(『正蔵』一巻三四頁b)によれば、①鴛伽(Anga、アンガ)、②摩竭陀(Magadha、マガダ)、③迦■(Kasi、カーシー)、④居薩羅(Kosala、コーサラ)、⑤拔祇(Vij、ヴァッジ)、⑥末羅(Malla、マッラ)、⑦支提(Cedi、チェティ)、⑧拔沙(Varsa、ヴァッサ)、⑨居楼(Kuru、クル)、⑩般闍羅(Panchala、パンチャラー)、⑪阿湿波(Asvaka、アッサカ)、⑫阿般提(Avanti、アヴァンティ)、⑬婆蹉(Matsya、マツヤ)、⑭蘇羅婆(Surasena、シューラセーナ)、⑮乾陀羅(Gandhara、ガンダーラ)、⑯劍■沙(Kamboja、カンボージャ)、の一六国があったと伝えられます。

いま、十六王国併立時代の諸王のうち、日蓮遺文中における釈尊在世当時の国王としては、<sup>じょうぼんのう</sup> 浄飯王、<sup>はしのくおう</sup> 波斯匿王・<sup>びんばさらおう</sup> 頻婆娑羅王・<sup>うだえんおう</sup> 優陀延王・<sup>あぎたおう</sup> 阿耆達王・<sup>はるりおう</sup> 波瑠璃王・<sup>あじゃせおう</sup> 阿闍世王がみえます。本号では、このうち浄飯王について触れたいと思います。

### (一) 浄飯王

<sup>じょうぼんのう</sup> 梵名Suddhodana（シュッドドーダナ）。<sup>しゅどだな</sup> 首圖駄那などと音写し、漢名を白飯・浄飯・真浄などと訳します。

中印度のKapilavastu（迦毘羅城）の城主であり、Sihannus（師子頰王）の長子、釈尊の父です。王の兄弟には所説ありますが、『仏本行経』等には、白飯王・斛飯王・甘露飯王の三人の弟と甘露味という一人の妹がいたと伝えられます。隣国のKoliya（拘利）族のSuprabuddha（善覚）の二女Maya（マヤー、摩耶）を妃に迎え、父王の後を継いで王となりました。摩耶夫人との間に生れたのがSiddhartha（悉達多太子）、後の仏陀です。摩耶は産後七日に歿し、悉達多太子は第二夫人（一説に摩耶の妹）のMahaprajapati（マハープラジャパティ、摩訶波舍波提）に養育されました。浄飯王は太子の出家を憂い、留めようとしたましたが阻止できず、太子の出家した後も帰城を勧めましたが、その志の堅いことを知るに及んで五人の同行者（五比丘）を遣わしました。太子は成道し仏陀となり、後には王自身も仏道に帰依したといえます。

日蓮遺文では、『開目抄』（五五〇頁）、『兄弟鈔』（九二三頁）、『法蓮鈔』（九三五頁）、『千日尼御前御返事』（一五三八頁）、『四条金吾殿御返事』（一六六六頁）などに釈尊の父として、『法華題目鈔』（三九八頁）、『法

蓮鈔』（九三五頁）に提婆達多の叔父、『開目抄』（五六二頁）には羅羅の祖父としてその名がみえます。

『兄弟鈔』（九二七〜九二八頁）では、釈迦如来は太子にてをせし時、父の浄飯王、太子ををしみたてまつりて出家をゆるし給わず。四門に二千人のつわものをすへてまほらせ給ひしかども、終にをやの御心をたがへて家をいてさせ給ひき。一切はをやに随ふべきにてこそ候へども、仏になる道は随はぬが孝養の本にて候か。されば心地観経には、孝養の本をとかせ給ふには、棄恩入無為真実報恩者等云云。

と、父母の心に随わずとも父母の孝養・報恩となった例として釈尊の出家をあげ、「恩を棄て無為（仏道）に入るは真実報恩の者なり」（典拠は『心地観経』としますが未詳）の最たるものとして引きます。『報恩抄』（一九二頁）、『兵衛志殿御返事』（一四〇五頁）においても、同様の義が説かれます。

また、『撰時抄』（一〇〇五・一〇二〇頁）では、釈尊が父に『観仏三昧経』を、母に『摩訶摩耶経』を説いて、父母に孝養の道を尽くしたことが述べられます。

日蓮遺文の国王たち ― 印度・西域篇 ― (二) 「波斯匿王・頻婆娑羅王」

高森大乘

『法華』九七卷一〇号に引き続き、印度・西域の諸王の事蹟を確認し、また日蓮遺文中の記述を概観して、これら諸王に対する日蓮聖人の理解と認識について述べたいと思います。

なお、諸王の事蹟については、主に望月信亨編『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行会）、立正大学日蓮教学研究所編『日蓮聖人遺文辞典』歴史篇（身延山久遠寺）、中村元編『広説仏教語大辞典』（東京書籍）などに基づいて、紹介します。

(二) 波斯匿王

梵名 Prasenajit（プラセーナジット）。波斯匿・鉢羅犀那折多・卑先匿などと音写し、漢名は勝軍・勝光・和悦・明光・月光（これに対して釈尊は日光と呼ばれた）などと訳されます。在位は、前六世紀頃または前五世紀頃と伝えられます。

釈尊在世中の中印度コーサラ国（Kosala、■薩羅国）舎衛城の王。父は同城主ブラフマダッタ（Brahmadatta）あるいは前王マハーコーサラ（Mahakosala）といわれ、釈尊降誕の日に生まれ、釈尊成道の年に即位、コーサラ国とカシ国（Kasi、迦■国）を領有し大いに威を奮いませた。深く仏教に帰依し、八〇歳で歿したと伝えられます。

王の即位および釈迦族との婚姻については、『増一阿含経』に詳しく説かれます。波斯匿王は、釈尊が成道してまもない頃に即位し、釈迦族より后を娶らんとしました。釈迦族は波斯匿王が暴悪無信のため、妃を差し出さなければいざれ侵略に及ぶことを危惧しました。また、一族の血筋を種性高貴であると自負する釈迦族にとつて、下賤の王との婚姻は忌むべきことでもありました。そこで、釈子大名のマハーナマ（Mahanama、摩訶摩男・摩訶那摩・摩訶男）は、一計を案じ、自分と婢女との間に生まれた容姿端麗な一女マツリカー

(Malika、末利)を釈種(釈迦族出身)の女と偽って嫁がせました。王はこれを第一夫人として迎え、一男ヴィドゥーダバ(Vidudaha)、毘瑠璃・毘流勒・波瑠璃・破瑠璃・毘盧積迦)をもうます。

『中阿含経』によれば、王は、先に帰仏(釈尊に帰依すること)していた末利夫人の導きで優婆塞(在家の信者)となり、仏教を外護したと伝えられます。また、王のもうひとりの太子ジェータ(Jeta、祇陀・祇多)は、自身が所有する林園をスダッタ(Sudatta、須達多)長者に譲って祇樹給孤独園(祇園精舎)を建てたことで知られます。

当時の中印度の二大王国は波斯匿王のコーサラ国とビンビサーラ王(頻婆娑羅王、Bimbisara)のマガダ国(Magadha、摩竭陀国)でしたが、波斯匿王は、妹(一説に姉)のコーサラ・デーヴィー(Kosaladevi)をマガダ国の頻婆娑羅王に嫁がして、その嫁資としてカシ国一国を提供したといわれます。『雑阿含経』によれば、晩年、カシ国の領有を巡って、頻婆娑羅王の子アジャータシャトル(Ajatasattu、阿闍世)と対立し、一時舎衛城より敗走しましたが、後に阿闍世を破り、これを捕虜としてマガダ国に還しました。更に『有部毘奈耶雜事』によれ

ば、その三年後、波瑠璃太子の謀反により王位を奪われ、阿闍世に救いを求めてマガダ国に逃げるも、果たさずに命終したといわれます。ちなみに、『有部毘奈耶雜事』は、波斯匿王歿後ほどなくして、波瑠璃王が釈迦族のカピラバストウ(Kapilyastu、迦毘羅衛城)を攻略したことを伝えます。

なお、母親の名前は仏典により一致せず、『有部毘奈耶雜事』では、第二夫人シリマーラー(Srimala、勝鬘)を母とします。マツリカー(末利)とシリマーラー(勝鬘)を同一人物とする説もありますが、『勝鬘経』によれば、勝鬘夫人は波斯匿王と末利夫人の娘で、アヨディーヤー国(Ayodhya、阿踰闍)友称王の妃になった人物とされるなど、一定ではありません。

日蓮遺文では、『守護国家論』(一一四頁)、『立正安国論』(二二二頁)、『立正安国論(広本)』(一四七〇頁)などにおいて、『仁王般若波羅蜜多経』受持品(『正蔵』八卷八三二頁b)の引文中に、対告(經典が説かれた相手・対象)としてその名がみえる程度で、日蓮聖人の認識を知りうるには足りません。しかしながら、十六大國の国王を対告に「仁王」による護國の因縁を説いた『仁王般若波羅蜜多経』では、波斯匿王は、仏法外護の

王として位置づけられていることで知られます。

日蓮聖人は、『開目抄』(五六四〜五六五頁)において、次のように説かれます。

仏すら九横の大難にあひ給ふ。(中略)六師同心して阿闍世・婆斯匿王等に讒奏して云く、瞿曇は閻浮第一の大悪人なり。彼がいたる処は三災七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の衆木をあつめたるがごとし。瞿曇がところには衆悪をあつめたり。いわゆる迦葉・舍利弗・目連・須菩提等なり。

大意は、以下の通りとなります。

六師外道は心をあわせて阿闍世王や婆斯匿王に次のように讒言しました。「瞿曇(ゴータマ)の音写、釈尊をさす)は、世界で第一番の大悪人であり、瞿曇が行くところには三災七難がつきつき起こって来る。あたかも大海にもろもろの河川が流れ入り、大きな山に大小さまざまな樹木が成長するように。そのように瞿曇のもとにはもろもろの悪人が集まっており、瞿曇の弟子の迦葉・舍利弗・目連・須菩提たちがその代表なのである」と。

『開目抄』では、六師外道が阿闍世王や婆斯匿王に対して釈尊を讒言したことが記されます。六師外道とは、

釈尊在世当時、中印度に勢力のあった六人の外道論者のことで、いずれもバラモン教至上主義を否定する教団を形成しました。無道徳論を説くプーラナ・カッサパ、無因論的感覚論を説くパクダ・カッチャーヤナ、懷疑論を説くサンジャヤ・ベーラッティプッタ、唯物論を説くアジタ・ケーサカンバリン、宿命論的自然論(アージュヴィイカ教)を説くマツカリ・ゴースラー、苦行論(ジャイナ教)を説くニガンタ・ナータプッタ(尼乾子)が代表的人物として知られます。こうした六師外道や提婆達多の言に唆されて、阿闍世王は釈尊とその教団に危害を加えました。が、婆斯匿王は、彼らの奸計に惑わされることなく、釈尊や仏弟子を外護した国王として、日蓮聖人は評価されるのです。

(三) 頻婆娑羅王

梵名は、Bimbisara(ビンビサーラ)。頻婆娑羅・瓶沙などと音写され、漢名は影勝・影堅・模実・諦実などと訳されます。

釈尊在世の中印度マガダ国の王。生歿・在位は、前六世紀頃または前五世紀頃とされますが、詳らかではありません。一説にはシャイシュナーガ(Saisunaga)朝第五

世とする説もあります。

大蓮華王の太子として釈尊と同日に生まれ、その威光が光影殊勝なるをもって「影勝太子」とも命名されます（『有部毘奈耶出家事』）。

コーサラ国より波斯匿王の妹コーサラデーヴィー（Kosaladevi）、ヴィデーハ国（Vidaha、毘提訶国）よりヴィデーヒ（Videhi、韋提希）を迎えて后とし、韋提希はアジャータシャトル（Ajatasattu、阿闍世）を生みます。なお、韋提希は、一説に波斯匿王の妹ともいわれています（『雑阿含経』『出曜経』）。

釈尊より五歳年少の頻婆娑羅は、一五歳で王位につき、三一歳の時、釈尊に帰依したと伝えられます（『巴梨文大史』）。

王は、釈尊が出家してマガダ国に立ち寄った時に、その深志にうたれ、成道の暁には最初に化導せんことを願じたともいわれ（『修行本起経』）、また国を分けて統治することを勧めて出家をとどめさせようとしたともいわれます（『方广大莊嚴経』）。

王は、釈尊成道の後、四諦の法を説くのを聞いて優婆塞（男性の在家の信者）となり（『中阿含経』『頻婆娑羅王仰仏経』）、竹林精舎を寄進するなどして釈尊

とその教団を外護しました。

王は毎日三時に臣属を率いて仏所に詣り、釈尊を礼観したと伝えられますが、晩年は身衰えて仏所に至らざるに及んで、仏の髪の毛や爪を求め、のちに宮殿内の塔寺に安置して礼拝したといわれます（『撰集百緣経』）。

釈尊入滅の七年前、王は息子の阿闍世に怨まれ、デーバダッタ（Devadatta、提婆達多）と共謀した太子によって幽閉され、権力を奪われた上、獄中にて命終したと言います（『有部毘奈耶破僧事』）。

頻婆娑羅が阿闍世に怨みを持たれたのは、老齡にして子のなかつた王が、占相師に占わせたところ、王舎城五山の一つヴィプラ（毘富羅）山に住するひとりの仙人が死後に王の太子となって托生することを告げられ、仙人の死を待ちきれなかつた王が、存命中にもかかわらずこの仙人を殺害したところ、韋提希が阿闍世を懷妊・出産したという故事によります。

王は、再び占相師に阿闍世のことを占わせたところ、いづれ父王を害するであろうことを予告され、王はこれを恐れて阿闍世を高樓より地に捨てましたが、王子はただ一指を折るにとどまりました。

このように未生以前（まだ誕生する前）に既に怨を結

んでいたことをもって、阿闍世は「未生怨太子」とも呼ばれます（『大般涅槃經』）。

王は獄中より遙かに耆舍崛山（靈鷲山）を望んで仏影を拝していましたが、阿闍世はそれを知って牢獄の窓を閉塞じ、かつ王の足下を刺して立てなくさせました。釈尊は、幽閉された頻婆娑羅のもとに弟子の目連を遣わして慰問せしめたといえます。

このように父王を苦しめた阿闍世でしたが、ある日、阿闍世が我が子の疾患を憂える姿を見た母の韋提希が、かつて同様に幼き阿闍世の疾患を憂えたという父王の慈愛を語ったところ、阿闍世の逆心は、たちまちに止んだといえます。

急ぎ阿闍世は父王を赦そうと、家臣を父王のもとに向かわせませんが、悲しいかな、父王は苦刑が加えられるものと錯誤し、迷悶して絶命してしまいました。この所謂「王舎城の悲劇」は、釈尊の晩年に起こった事件として知られています。

日蓮遺文では、『祈祷鈔』（六七五頁）、『法華取要抄』（八一二頁）、『法蓮鈔』（九三五〜九三六頁）、『妙一尼御前御返事』（九九九〜一〇〇〇頁）、『上野殿御返事』（一三〇六頁）、『日女御前御返事』（一五一六頁）、

『兵衛志殿御返事』（二六〇五頁）など、多くの遺文に、頻婆娑羅王の故事を引ききます。

頻婆娑羅王が釈尊ならびにその教団を外護した史実に  
ついて、しばしば日蓮聖人は、王が臣属を率いて仏所を  
毎日訪れた故事に触れ、「日日に仏ならびに御弟子を供  
養し奉りき」（六七五頁）、「日日に五百輛の車を数年  
が間一度もかかさずおくりて、仏ならびに御弟子等を供  
養」（九三六頁）、「教主釈尊に日々日々に五百輛の車を  
をくり」（一六〇五頁）などと説いています。

また、『四条金吾釈迦仏供養事』（一一八四頁）、『日  
眼女釈迦仏供養事』（一六二四頁）では、檀越の四条頼基  
や日眼女の釈迦仏造立の志を讃え、優填王の仏像造立  
の故事（次号以降に紹介）と並んで、頻婆娑羅王の造像  
の故事を示していますが、頻婆娑羅王の造像については、  
恐らくは老齢のため仏所に詣でることが叶わなくなった  
王が、仏の髮爪を宮殿に奉安し礼拝した故事に由来する  
ものと思われる。

日蓮聖人の頻婆娑羅王に対する認識で、特筆すべき点  
は、やはり何よりも太子の阿闍世との葛藤です。『上野  
殿御返事』（一三〇六頁）では、

びんばさら王と申せし王は賢王なる上、仏の御だん

な（檀那）の中に閻浮第一なり。しかもこの王は摩竭提国の主なり。仏はまた此の国にして法華經をとかんとおぼししに、王と仏と一同なれば、一定法華經とかれなんとみへて候しに、提婆達多と申せし人、いかんがして此の事をやぶらんとおもひしに、すべてたよりなかりしかば、とかうはかりしほどに、頻婆沙羅王の太子阿闍世王を、としごろ（年頃）とかくかたらひて、やうやく心を取り、をや（親）と子とのなか（仲）を申したがへて、阿闍世王をすかし、父の頻婆沙羅王をころさせ、阿闍世王と心を一にし、提婆と阿闍世王と一味となりしかば、五天竺の外道・悪人、雲かすみのごとくあつまり、国をたび（給）、だから（財）をほどこし、心をやわらげ、すかししかば、一国の王すでに仏の大怨敵となる。

と、釈尊の有力な外護者のひとりであった頻婆娑羅王が、提婆達多にそそのかされた太子の阿闍世によって殺害されたことが示されています。

同様の記述は、『祈禱鈔』（六七五頁）、『法蓮鈔』（九五〇―九三六頁・九四〇頁）、『妙一尼御前御返事』（九九〇―一〇〇〇頁）等にもみえ、特に『祈禱鈔』（六七五頁）では「父を終に一尺の釘、七つをもてはりつけに

なし奉りき」、『法蓮鈔』（九四〇頁）「賢王にて、とが（咎）もなかりし父の大王を一尺の釘をもて七処までうちつけ、はつけ（磔）にし」などと、阿闍世によって足を刺された故事が引かれています。

なお、『日女御前御返事』（一五一―一六頁）では、国主の積功累徳が後代の安寧につながる例として、中国の殷周革命を起こした文王の故事とともに引き合いに出され、

周の文王は老たる者をやしなひていくさに勝ち、其の末、三十七代八百年の間、すゑずゑ（末々）には、ひが（僻）事ありしかども、根本の功によりてさか（栄）へさせ給ふ。阿闍世王は大悪人たりしかども、父びんばさら王の仏を数年やしなひまいらせし故に、九十年の間位を持ち給ひき。

と、頻婆娑羅王が釈尊を供養した功德によって阿闍世王の悪業が変じ、永年に在位を保てたと説いておられます。これは、阿闍世が釈尊入滅にあたり改心して仏教の外護者になったこととの関連で述べられているものと思われるます（次号以降に紹介）。

また、『法華取要抄』（八一―一二頁）では、日蓮聖人当時の日本国が一同に釈尊を忘失し、他仏を頼みとして

ことを非難する譬<sup>たと</sup>えの中に、「此等の諸師ならびに檀那等、釈尊を忘れて諸仏を取ることとは、例せば阿闍世太子の頻婆沙羅王を殺し、釈尊に背いて提婆達多に付きしがごとし」と説示されています。

たかもり だいじょう（法華会評議員・立正大学准教授）

『法華』九七卷一一号に引き続き、本号では、印度の十六大国併立時代の王として、優填王と阿耨達王の事蹟を確認し、日蓮聖人の知識と認識について述べたいと思います。

(四) 優填王・優陀延王

梵名 Udayana (ウダヤナ)。優填・于■・優陀延などと音写。漢名は、出愛・日子などと訳されます。

釈尊在世中のコーサンビ国 (Kosambi、■ 弥国) の王 (『四分律』)。釈尊在世中の仏教を保護した王として知られ、また仏像造立の初めとして賞賛されます。

王の帰仏 (仏陀に帰依すること) の因縁は、『優填王経』等に記されます。優填王は、コーサンビ国より后に迎えた無比の奸言を信じ、正后の舎摩を箭で射殺しようとしたますが、箭は舎摩の周囲を三匝 (三度廻ること) して王の前に戻ってしまいます。王は懼れをなしてその理由を舎摩に訪ねたところ、舎摩はかつて釈尊の教化に浴して

優婆夷 (女性の在家信者) となり、王を哀愍して慈心定に住していたので害心およばなかったことを告げ、釈尊に帰命 (帰依) するよう王を諭します。王はただちに仏所に至り、優婆塞 (男性の在家信者) となったと伝えられます。

また、釈尊が亡き悲母のマーヤ (Maya、摩耶) を導くため三十三天に上昇した際、優填王は釈尊を三ヶ月拝せないこと憂い、病にかかってしまったといいます。群臣は議して如来の形像を造り王の病を治癒せんと進言し、王の勅命を得て牛頭梅檀をもって高さ五尺の形像 (一説に七尺の坐像) を造立したところ、王の病がたちまちに癒えたといえます。波斯匿王 (九七卷一一号参照) はこれを聞き、紫磨黄金をもって五尺の仏像を造立したので、閻浮提 (娑婆世界) に二軀の仏の形像が現れるに至ったといえます (『大方便仏報恩経』『観仏三昧海経』『大乘造像功德経』『大唐西域記』)。清涼寺式釈迦像は、これを模したものと伝えられます。

なお『増一阿含経』（『正蔵』二卷六八一頁c）には、波斯匿王・毘沙王（頻婆娑羅王）・優填王・悪生王（波瑠璃王）・優陀延王の五人の王名が挙げられており、優填王と優陀延王は別人ともされません。

日蓮聖人の優填大王解釈については、閻浮提初の仏像を造立した王として引く『法蓮抄』（九四一頁）、『四条金吾釈迦仏供養事』（一一八四頁）、『日眼女釈迦仏供養事』（一六二四頁）などにおいては「優填大王」と表記し、賓頭盧尊者を蔑如した王として引く『神国王御書』（八九一頁）、『四信五品抄』（一二九九頁）、『下山御消息』（一三三四頁）などにおいては「優陀延王」と表記して使い分けているので、同一人物と見なしていたか否かは詳らかではありません。

具体的に、前者の優填王については、いずれも生身の仏を造立した王として讃えられ、例えば、『日眼女釈迦仏供養事』（一六二四頁）には、

昔、優填大王、釈迦仏を造立し奉りしかば、大梵天王・日月等、木像を礼しに参り給ひしかば、木像、説ひて云く、我を供養せんよりは優填大王を供養すべし等云云。影堅王の画像の釈尊を書き奉りしも、又々かくのごとし。

と示されます。ここでは、優填王とならんで頻婆娑羅王（影堅王）の造像の事蹟が示され、同様の記述は、『四条金吾釈迦仏供養事』（一一八四頁）にも確認されますが、頻婆娑羅王の造像の典拠は詳らかではありません。あるいは伝承で言われる波斯匿王の故事をさすものかも知れません。

一方、後者の優陀延王については、例えば『下山御消息』（一三三四頁）では、

日蓮が出現して、一切の人を恐れず、身命を捨てて指し申さば、賢なる国主ならば子細を聞き給ふべきに、聞かず、用ひられざるだにも不思議なるに、剩へ頸に及ばんとせしは存外の次第なり。（略）夏の桀王は竜蓬が頭を刎ね、殷の紂王は比干が胸をさき、二世王は李斯を殺し、優陀延王は賓頭盧尊者を蔑如し、檀弥羅王は師子尊者の頸をきる。武王は惠遠法師と諍論し、憲宗王は白居易を遠流し、徽宗皇帝は法道三蔵の面に火印をさす。これらは皆諫暁を用ひざるのみならず、還って怨を成せし人々、現世には国を亡し身を失ひ、後生には悪道に墮つ。

などと譬えています。賢人の諫言を用いなかった国主が、

失位・亡国の末路を辿ったことを、後の妹喜を寵愛し諫臣の龍逢を殺害して夏王朝を滅ぼした桀王、後の妲己を寵愛し諫臣の比干を殺害して殷王朝を滅ぼした紂王、趙高の奸計により有能な宰相李斯を殺害した秦王朝第二世胡亥、付法蔵の師子尊者を殺害し天竺の仏法を断絶した檀弥羅王（次号以降紹介）、三武一宗の廢仏毀釈の第二を断行した北周第三代皇帝の高祖武帝宇文文王、白居易の諫言を用いずこれを左遷した唐王朝第一一代皇帝の憲宗、道教庇護の政策を諫めた法道を処罰し仏教を抑圧したため国位を喪失した北宋第八代皇帝の徽宗などを先例して引いているのです。

なお、『神国王御書』（八九一頁）には、優陀延王・徽宗皇帝のほかに、北宋を滅ぼした欽宗皇帝、仏教を弾圧した訖利多王（次号以降紹介）の故事が引かれます。これらの国主に対する日蓮聖人の認識は、「賢なる国主」にあらざる国主とみなしていることが読み取れるのです。

(五) 阿耆達王・阿耆多王

梵名 Agnidatta (アグニダッタ)。阿耆達・阿耆多・阿

祇達などと音写する。釈尊在世中のコーサラ国 (Kosala)

舎衛城の婆羅門の王。阿耆達王はスダッタ（須達多）との論議によって釈教を知り、祇樹給孤獨園の釈尊のもとへ往き教えを聴聞し、安居に釈尊を招聘しました。釈尊は五百の比丘とともに阿耆達王のもとを訪れましたが、王は五欲の享樂にふけり供養するのを忘れ、釈尊は馬に食わせる麦を施され、三ヶ月九〇日間の長きに及んだといいますが（『大智度論』『興起行経』等にみえる「九横の大難」の一）。

三月の安居を終え、釈尊が去ろうとした時、阿耆達は非善を悔い、釈尊の教えによって法眼淨を得たといいます（『中本記経』）。

日蓮遺文では、釈尊に九横の大難を蒙らせた国王として、『開目抄』（五六四頁）、『法華行者値難事』（七九七頁）、『上野殿御返事』（一三〇七頁）、『聖人御難事』（一六七二頁）など諸書において波斯匿王・波瑠璃王・阿闍世王らとともに引かれ、その内容も「一夏九十日、馬のむぎをまいりし」（一三〇七頁）、「馬の麦をもつて九十日」（一六七二頁）などと示されています。

ほかに、『断簡二七七』（二九六三頁）には、阿耆多王を「悪王」と定めた表現が確認されます。

たかもり だいじょう（法華会評議員・立正大学准教授）

高森大乘

『法華』九八卷一号に引き続き、本号では、印度の十六大国併立時代の王として、波瑠璃王の事蹟を確認し、日蓮聖人の知識と認識について述べたいと思います。

(六) 波瑠璃王

梵名は、Vidudabha (ヴィドウーダバ)。毘瑠璃・毘流勒・毘楼勒・琉璃・瑠璃・毘盧积迦・破瑠璃などと音写、漢名は、増長と訳し、悪生王とも呼ばれました。

波斯匿王 (本誌九七卷一一号参照) の子で、父王のあとコーサラ国 (Kosala) 舍衛城の王につきます。在位は、前六世紀頃または前五世紀頃と推測されています。积迦族の下女を母 (末利夫人) にもつ出自を聞かされ、また侮辱を受けたことで逆害の心を抱くようになり、父王を放逐して王位を篡奪すると、三度目の出兵で积迦族を殲滅しました (『有部毘奈耶雜事』)。カピラバストウ (Kapilavastu、迦毘羅城) に侵攻した波瑠璃王は、マハーナマ (摩訶男) をはじめとする积種 (积迦族) 九百九

十九万人を殺し、また五百人の积女 (积迦族の女性) を弄ぼうとしましたが頑なに拒まれたので、手足を切つて深坑に埋めたといえます。ついで舍衛城に還ると、父王の太子ジェータ (祇陀) が妓女と享楽にふけつていのを目の当たりにし、怒つてこれを殺しました。

時に积尊は、諸比丘を率いて迦毘羅城に至り、五百の积女のために法を説き、みな法眼浄を得て天上に生ぜしめたと伝えられます。更に舍衛城に赴き、波瑠璃王が七日後に亡びることを予記しました。

王は七日目になつて何事も起こらなかつたので、阿脂羅川で兵衆や女 (遊女) と娯楽していたところ、夜半に暴風疾雨おこり、王は死して阿鼻地獄に入り、その宮殿も悉く天火に焼かれたといえます (『法句譬喻經』『五分律』)。『大唐西域記』には、王が最初の出兵の際に积尊を見て軍を引き返した旧跡、王が墮獄した大涸池、积迦族の供養のために建てられた卒堵婆などの所在が記されています。

なお、波瑠璃王の歿後、迦毘羅国は、阿闍世王（次回紹介）によって兼併されました。

日蓮遺文では、九横の大難（釈尊や仏弟子が外道や敵対者から在世中に蒙った九種の迫害）のひとつに数えられる「琉璃殺釈」（七九七頁）の故事を引く際に、波瑠璃王の名がみえます。また、その具体的内容も、『頭誦法鈔』（二六三頁）に「波瑠璃王の九千九十万人の人をころして血ながれて池をなせし」、『開目抄』（五六五頁）に「無量の釈子は波瑠璃王に殺され」、『祈祷鈔』（六七〇頁）に「波瑠璃王の五百人の釈子を殺し」、『妙心尼御前御返事』（一一〇三頁）に「はるり王と申せし悪王、仏のしたしき女人五百余人を殺して候し」、『上野殿御返事』（一三〇七頁）に「さればはるり王と申せし王は阿闍世王にかたらはれ、釈迦仏の御身したしき人数百人切りころす」、『聖人御難事』（一六七二頁）に「無量の釈子の波瑠璃王に殺されし」などと説かれています。

『行敏訴状御会通』（五〇〇頁）には、破仏・破法の王として弥羅掘王（大族王）・弗沙弥多羅王・設賞迦王ら（いずれも次回以降に紹介）とともにあげ、  
毘瑠璃王は七万七千の諸の得道の人を殺す。月氏国

（概してインドをさす）の大族王は率都婆を滅毀し、僧伽藍（サンガのこと）を廢することおよそ一千六百余処、乃至大地震動して無間地獄に墮ちにき。毘盧釈迦王は釈種九千九百九十万人生け取り、並べ従えて殺戮す。積屍芥のごとく、流血池を成す。弗沙弥多羅王は四兵を興して五天（インド全土）を回らし、僧侶を殺し寺塔を焼く。設賞迦王は仏法を毀壞す。訖利多王は僧徒を斥逐し、仏法を毀壞す（原文）。

とみえます。なお、遺文中には本来同一人物の毘瑠璃王と毘盧釈迦王とを別個に挙げておりますが、日蓮聖人が両者を別人と認識していたか否かは定かではありませ

ん。

また、波瑠璃王の釈種虐殺の故事は、『祈祷鈔』（六七〇頁）、『報恩抄』（一一九九頁）などにおいて、第六天魔王（他化自在天）。仏道を妨げ悪業をなさしめる天魔）による悪鬼入其身（魔や鬼が身体に入り込むこと）の例として阿闍世王・提婆達多・瞿伽利とともに引かれることもあります。

波瑠璃王が阿脂羅川で墮獄した故事について触れた遺

文としては、『神国王御書』（八九一頁）があります。

釈子を殺せし波琉璃王は水中の大火に入り、仏の御身より血を出せし提婆達多は現身に阿鼻の炎を感じり。金銅の釈尊をやきし守屋は四天王の矢にあたり、東大寺・興福寺を焼きし清盛入道は現身に其の身も（燃）る病をうけにき。彼等は皆大事なれども日蓮が事に合すれば小事なり。小事すら猶しるしあり。大事いかでか現罰なからむ。

ここでは、『金光明最勝王経』四天王護国品の所説にならって四天王像を頭にいただいて戦に臨んだ聖徳太子ら崇仏派によって排仏派の物部守屋が滅ぼされた故事、天照・八幡の百王守護の誓願（人王を百代にわたり守護する誓い）に背いて南都北嶺（奈良と京都）の寺を焼いた平清盛らの因果応報とともに、波琉璃王・提婆達多の生身墮獄（生きながらに地獄に墮ちること）を引き、仏子日蓮を迫害する者への現罰について言及しています。

なお、『千日尼御返事』（一七六二〜一七六三頁）において、波琉璃王が父の波斯匿王から王位を篡奪した故事、頻婆娑羅王（本誌九七卷一一号参照）が太子阿闍世によって幽閉され命終した故事について触れ、「抑も子はかたきと申す経文もあり（略）はるり王は心もゆか

ぬ父の位を奪ひ取る。阿闍世王は父を殺せり」などといっているのは、父子敵対の先例として用いたものです。

たかもり だいじよう（法華会評議員・立正大学非常勤講師）

『法華』九八巻四号に引き続き、本号では、印度の十大国併立時代の王として、阿闍世王の事蹟を確認し、日蓮聖人の知識と認識について述べたいと思います。

(七) 阿闍世王

梵名 Ajatasatru (アジャータシャトル)。阿闍世・阿闍世・阿闍世・阿闍世多設咄路・阿闍世多沙兜楼などと音写し、漢名は未生怨・法逆と訳されます。釈尊在世中の中印度マガダ国王。在位は、前五世紀初頭頃。父は頻婆沙羅王、母は韋提希夫人(一説に波斯匿王の妹)とも。父王を殺害し、提婆達多にそそのかされて釈尊を迫害しましたが、後に改心し仏滅後の第一結集の際に大檀越として仏教を外護したと伝えられます。

阿闍世の出生に関しては、かつて頻婆娑羅王の稿(本誌九七巻一―号)で紹介しましたので略しますが、父王に対する幼少期の遺恨もあってか、その後、成長した阿闍世王は、父王の帰依する釈尊とその教団に反抗し新教

団を形成せんとしていた提婆達多の奸計にかかり逆心を起こし、その言を入れて父王を幽閉し、また母が身体に蜜を塗って幽閉中の王に施していた事を知るや母も幽閉せしめたことで知られます。

父王が獄中で命終すると、阿闍世は殺父の罪を悔い、その重圧で身体に悪瘡を患いました。そして医者であるジーヴァカ(Jivaka、耆婆)の導きにより、釈尊のもとへ赴くよう勧められます。時に釈尊は、クシナガラ(Kusinagara、拘尸那揭羅)の沙羅双樹のもとで涅槃(入滅)せんとしていましたが、阿闍世を救うために涅槃に入るのをとどめ、阿闍世の悪瘡を治癒したといえます。これにより、阿闍世は菩提心を起こし、仏教に帰依し教団を支援するようになったと伝えられています。

釈尊の荼毘が終わり、その遺骨を八分せし時、王はその一分を得て、王舎城に舍利塔を建立して供養したと伝えられます。釈尊入滅後は、四隣を服して中印度の盟主となり、仏滅後の第一結集には、大檀越としてこ

れを外護しました。

日蓮聖人の阿闍世王解釈については、すでに原愼定氏の先行研究（『日蓮教学における罪の研究』一九九九年）ほかにおいても指摘されるように、阿闍世を提婆達多や外道との関係の中で取り上げることが多いことに気付かされます。

例えば、『法華題目鈔』（三九八〜三九九頁）では、提婆達多は（略）阿闍世太子をかたらいて云く、我は仏を殺して新仏となるべし。太子は父の王を殺して新王となり給へ。

と、阿闍世王が提婆達多に唆された故事が引かれ、ほかにも『顕謗法鈔』（二六二〜二六三頁）、『開目抄』（五八九頁）、『法華取要抄』（八一二頁）、『報恩抄』（一一九九頁）、『諫曉八幡鈔』（一八三八・一八四一頁）など諸遺文において、提婆達多は、瞿伽梨や善星比丘らを弟子とし、阿闍世を信者として無量の五逆（殺父・殺母・殺羅漢・破和合僧・出仏身血）謗法（誹謗正法）の者を集め、釈尊とその教団に敵対したことが述べられております。

また、阿闍世がこの提婆達多を悪知識（邪悪な師）として父母を害したことが、『祈祷鈔』（六七五頁）、『法

蓮鈔』（九三五〜九三六頁）、『法蓮鈔』（九四〇頁）、『上野殿御返事』（一三〇六頁）等にみえ、『開目抄』（五六四〜五六五頁）、『上野殿御返事』（一三〇七頁）、『聖人御難事』（一六七二頁）では、酔象を放ちて釈尊に危害を加えようとしたこと（九横の大難の一）が指摘されます。

この悪逆（三悪・五逆）の限りを尽くした阿闍世が、自業自得果を受けて、墮獄の先相として悪瘡を生じ、生きながらにして墮地獄の苦を味わったことについて、『可延定業御書』（八六二頁）には、

阿闍世王は御年五十の二月十五日、大悪瘡身に出来せり。大医耆婆が力も及ばず。三月七日必ず死して無間大城に墮つべかりき。五十余年が間の大楽、一時に滅して、一生の大苦、三七日にあつまれり。定業限りありしかども、仏、法華経をかさねて演説して、涅槃経となづけて大王にあたえ給ひしかば、身の病忽に平癒し、心の重罪も一時に露と消えにき。

とみえ、また『法蓮鈔』（九四〇頁）にも同様に、悪瘡発症の時期、墮獄の時期と期間などが詳述され、また阿闍世が後に改心して釈尊に帰仏し、涅槃経の説会におい

て聞法した法華経の経力によって、これら大苦を免れたことが示されておりあります。

すでに紹介の通り、釈尊在世中の破仏・破法の暴君には波瑠璃王と阿闍世王とがいるわけですが、両者のうち阿闍世王には仏陀による救済が説かれる点が特徴的です。釈尊にとつても、阿闍世王が救済すべき病子であったことは、『大般涅槃経』梵行品（『正蔵』一二卷四八頁a）に七子の喩をもつて説かれるところであり、日蓮聖人も『妙一尼御前御返事』（九九九〜一〇〇〇頁）において、この文を引いて「我涅槃すべし。但心にかゝる事は阿闍世王のみ」「今日より悪瘡身に出て、三月の七日無間地獄に墮つべし。これがかな（悲）しければ、我涅槃せんこと心にかゝる」などと、釈尊の心情を説明しています。

阿闍世王の帰仏については、善知識（善き師）となつた良医者婆らの導きがあつたことが、『四条金吾殿御返事』（一六六六頁）に「阿闍世王は仏の御怨なりしが、耆婆大臣の御すゝめによつて、法華経を御信じありて代を持ち給ふ」と説示され、ほかに『守護国家論』（一二三頁）、『頭謗法鈔』（二六一頁）、『開目抄』（五七五頁）、『崇峻天皇御書』（一三九一頁）な

どに同様の説示がみえます。

阿闍世王は、釈尊の入滅に際し涅槃経の説法を聞いて救われたわけですが、王が涅槃経の前に説かれた法華経の序品（『開結』五九頁）にも列座していることについて、日蓮聖人は、『撰時抄』（一〇〇三頁）において、「靈山会の上の砌には閻浮第一の不孝の人たりし阿闍世大王、座につらなり、一代謗法の提婆達多には天王如来と名をさづけ（以下略）」と阿闍世は、法華経の提婆達多品の説時において提婆達多の悪人成仏の記別（未来成仏の保証）を聞法したことを指摘します。

法華経における提婆達多の記別によつて一切の悪人も未来に成仏することが保証され、続く涅槃経で阿闍世王が闡提成仏（極悪人の成仏）の代表として救われるのです。

涅槃経における阿闍世の救済の因はあくまでも法華経の教えによるものであり、日蓮聖人も『富木尼御前御書』（一一四八頁）において、「阿闍世王は法華経を持ちて四十年の命をのべ（延）」と述べられています。

たかもり だいじょう（法華会評議員・立正大学非常勤講師）

『法華』九八卷一〇号に引き続き、本号では、印度の  
マウリア王朝・シュンガ王朝期の王として、阿育王と  
弗沙弥多羅王について、日蓮遺文を紐解きます。

三、マウリヤ王朝期・シュンガ王朝期の王

マウリヤ朝 (Maurya、孔雀王朝) は、前三一七年頃〜  
前一八〇年頃に、古代印度マガダ国に興った王朝です。  
前三一七年頃、チャンドラグプタ (Chandragupta、旃陀羅  
崛多) によって建国されました。アショーカ王 (Asoka、  
阿育王) の時代に全盛期を迎え、南端部分を除く印度亜  
大陸全域を統一します。しかし王の歿後、国家は分裂し、  
前二世紀初頭、シュンガ (Sunga) 朝の勃興により滅亡  
しました。

(一) 阿育王

梵名 Asoka (アショーカ)。阿輸迦・阿輸伽・阿育な  
どと音写し、漢名は無憂と訳します。祖父チャンドラグ

プタの悲願であった統一国家建国の事業を継承し、印度  
史上初の統一国家マウリア王朝 (Maurya、孔雀王朝) を  
建国しました。釈尊滅後およそ百年または二百年頃に  
世したマウリア王朝第三代皇帝で、在位は前二六八〜二  
三二年頃とされますが、王の出世年代・治世年代につい  
ては諸説あります。

若き頃は暴虐な性格で、タクシラ国 (Taxasila、徳叉  
尸羅) の反乱を平定してからは、権威を強め、父王の歿  
後、兄弟を殺して王位につきます。

王は婆羅門 (カースト四姓制度の最上位) の出身で、  
『小磨崖法勅』によれば、即位後八年目頃 (前二六〇  
年頃) に仏教に改宗したといわれますが、二年半は単に  
優婆塞 (男性在家信者) に留まり、信仰は熱心ではな  
かったと伝えます。治世九年目にカリリング国 (Kalinga、羯  
蚘伽) を攻めた征服戦争が、アショーカの宗教観に大き  
な影響を及ぼすこととなります。このカリリング戦争では、  
数十万人の死傷者を出し、十五万人が捕虜となって国内

各地に送られました。『大磨崖法勅』によれば、王は、このことを悔い、二百年の長きに及んだマガダ国による武力政策を改め、以後、対外遠征には消極的になり、法（ダルマ・dharma）による統治（法の政治）に専念するようになったといえます。仏教に深く帰依したのも、この頃です。王は、征服戦争を放棄すると、仏教の理想を実現するための政策を行いました。治世一〇年目頃から仏跡を巡礼（法の巡幸）し、国民に法を弘めるために各地に法勅を刻みました。このほか、道路や街路樹の整備、宿泊所・井戸の設置、人間や動物の施薬院（病院）の創設などの社会福祉事業も行ったといえます。

王自身は仏教徒でしたが、仏教以外のあらゆる宗教も平等に保護しました。阿育の磨崖碑文などで「法の政治」の内容として繰り返し伝えられるのは、慈悲・不殺生の精神に基づいて異民族・異文化との共生を説くものでした。また、王の援助で、首都パータリプトラ（Pataliputra、華氏城）にて第三結集が開かれたと伝えられますが、年代や討議の内容は詳らかではありません。なお、『阿育王伝』『雜阿含經』『善見律毘婆沙』等には、阿育王は八万四千の僧伽藍（寺院）を建て、八万四千の仏塔を造ったと伝えるが、王の法勅には確認されません。

阿育王は晩年、地位を追われ幽閉されたという伝説があり、また実際に治世末期の碑文などが発見されておらず、政治混乱が起こった事が推測されます。原因については諸説ありますが、宗教政策重視のために財政が悪化したという説や、軍事の軽視のために外敵の侵入に対応できなくなったなどの説が唱えられています。

日蓮遺文中において、阿育王の業績を具体的に挙げて称讃するものは少なく、『兵衛志殿御返事』（一六〇五頁）に、頻婆娑羅王（前出）の故事と併記して、「阿育大王の十億の沙金を鶏頭摩寺にせし」とみえる程度です。鶏頭摩寺（Kukkutarama）は、阿育王によって華氏城近郊に建立された精舎で、後に弗沙弥多羅王（後出）によって蹂躪されています。

日蓮聖人の阿育王解釈については、廣田哲通氏の先行研究（『中世仏教説話の研究』一九八七年）ほかでも指摘されるように、釈尊の所説あるいは未来記（未来の予言）が真実であることの傍証として、仏滅後百年目の阿育王の出世を予言した『雜阿含經』（『正蔵』二卷一六二頁a）・『阿育王經』（『正蔵』五〇卷一三二頁a）などにみられる仏記を挙げるものが多く、『法蓮鈔』（九四二頁）、『安国論御勘由来』（四二三頁）、『開目抄』（五六

○頁）ほかに確認されます。

また、阿育王が一閻浮提の大王として君臨することとなった由縁として、百年前、前生に徳勝（得勝）童子であった時、釈尊に対して戯れに沙餅を供養した功德を挙げる例が、『白米和布御書』（一一三二頁）、『松野殿御消息』（一一四二頁）、『兵衛志殿御返事』（一五〇五〜一五〇六頁）、『九郎太郎殿御返事』（一六〇三頁）、『随意御書』（一六一八頁）、『窪尼御前御返事』（一六四五頁）、『王日殿御返事』（一八五三頁）などにみえます。この故事の典拠は、『阿育王伝』（『正蔵』五〇巻九九頁b）に求められます。

(二) 弗沙弥多羅王

梵名 Pusanitra（プシヤヤミトラ）。弗沙弥多羅・弗沙蜜多羅・弗舍密多羅などと音写し、漢名は星友と訳されます。在位は、前一八〇年頃〜前一四四年頃。

前一八〇年頃、マウリヤ王朝（Maurya）のブリハドラタ王（Bhadrata）を殺して王位につき、シユンガ王朝（Sunga）を建国しました。首都パータリプトラ（Pataliputra、華氏城）を拠点にガンジス河流域の北印度を支配し、バラモン教を復興して仏教を抑圧します。鶏頭摩寺を再三

にわたって攻撃したほか、カシミールまで攻め入って、多くの仏塔や伽藍を破壊し、また修行僧を殺戮するなど、各地の僧伽に危害を加えたといわれます。北印度を併合し、在位三六年で歿しました。

王が、仏教を弾圧した理由について、『雑阿含経』『阿育王経』では、阿育王の起塔行施をこえる偉業を後世に伝えるために大悪事をなして名声を高めようと決意し、破仏を行ったと記されます。シヴァ神崇拜をする弗沙弥多羅王は、マウリヤ王朝が進めてきた仏教保護の政策に反動し、バラモン教の復興を図ったことがわかるのです。

日蓮遺文では、仏法を破壊した悪王として、釈尊在世中の波瑠璃王、中国唐朝第一代武宗皇帝（会昌の廢仏）、排仏派の物部守屋ら印度・中国・日本三国の廢仏毀釈の例示とともに引き合いに出されることが多く、その悪行は、『行敏訴状御会通』（五〇〇頁）に「弗沙弥多羅王は四兵を興して五天を回し僧侶を殺して寺塔を焼く」とみえるほか、『法華取要抄』（八一七頁）、『曾谷入道殿許御書』（九〇〇頁）、『法蓮鈔』（九五四頁）、『強仁状御返事』（一一二三頁）にも同様の記述がみえます。

たかもり だいじょう（法華会評議員・立正大学非常勤講師）

『法華』九八卷一一号に引き続き、本号では、印度のクシャーナ王朝期の王として、迦式色迦王・屹利多王・雪山下王について、日蓮遺文を紐解きます。

四、クシャーナ王朝期の王

阿育王（本誌九八卷一一号参照）の歿後、マウリヤ王朝は分裂・衰退し、ついに滅亡すると、ギリシア人やパルチア人が各地に侵入し勢力を競い合うようになりました。前二世紀頃、北西印度を支配したギリシア人のバクトリア王ミリンダ（Milinda）、メナンドロス王・弥蘭王・弥蘭陀王）は、仏教に帰依した王として知られます。

同じ頃、匈奴（フン族）に追われて西遷した遊牧民の大月氏は、中央アジアのバクトリアに定着しました。その支配下にあつたトカラ族の五翕侯のひとり貴霜（Kusana）は、紀元前後に大月氏にとってかわり、他の四翕侯を支配してクシャーナ王朝を創設します（『漢書西域伝』）。首都はペシヤワール（Purusapura、布楼沙補羅）

に置かれました。

こうして誕生したクシャーナ朝は、中央アジアから北印度にかけて、一世紀から三世紀頃まで栄えました。クシャーナ朝は、シルクロードの主な都市を支配したので、ギリシア・ローマや中央アジア・中国の文化が出逢い、ガンダーラ美術・マトウーラ美術などの芸術様式をはじめとする国際色豊かな融合文化が開花します。

日蓮聖人の遺文中においては、クシャーナ王朝期の代表的な王として迦式色迦王・屹利多王・雪山下王の故事が引かれています。

(一) 迦式色迦王・迦式志迦王

梵名は、Kanishka（カニシカ）。迦式色迦・迦式志迦・迦膩色迦などと音写。クシャーナ王朝にはカニシカ二世がいたことが知られますが、第四代君主カニシカ二世をさすのが一般的です。生歿年は未詳、治世は一二九〇一五二年頃とされますが異説も多く唱えられます（七八

年登位説・一四四年登位説など。『雑宝蔵経』『出三蔵記集』『婆薮槃豆法師伝』『大唐西域記』ほか。

王が仏教に帰依した由縁については、『雑宝蔵経』『付法蔵因縁伝』『大唐西域記』などに諸説が説かれますが、領民が多く仏教徒であったことから、施策上、仏教を奉じたとも言われています。いずれにせよ、王が仏教を外護し、各地に仏塔を建造したことは、多くの仏典の所説から明らかで、カシミールでは説一切有部の阿羅漢五百人を集めて『大毘婆沙論』二百巻を作成しました。王はまた、のちの大乗經典のもととなった三蔵（經蔵・律蔵・論蔵）を編纂する第四結集の援助をしたとも伝えられます。

また王が、詩人アシュバゴーシヤ（Asvaghosa、馬鳴）と親交を結んだこともよく知られるところです。カニシカ王は中央印度の華氏国を攻撃した際、現地の王に和平を請われ、和議の要償として三億金（『付法蔵因縁伝』では九億の金宝）を要求しました。現地の王がこれを支払い不可能であると回答すると、二億金を減額する代わりに馬鳴を送るよう要求したといっています。王は、馬鳴に師事し、馬鳴・大臣マータラ（摩紀羅）・医師チャラカ（遮羅迦）の三智人は、カニシカ王の親友・善知識（よ

き師）となったといっています（『雑宝蔵経』）。

王の歿後の王統の興廢は詳らかではありませんが、王にふたりの王子がいたと伝えるものもあり（『付法蔵因縁伝』）、あるいは王の歿後、訖利多（Kṛta）出身の者が王を自称し、僧徒を逐斥して仏法を毀壞したとも伝えられます（『大唐西域記』）。

仏教をあつく保護した迦式色迦王に対する日蓮聖人の評価は高く、『頭謗法鈔』（二六五頁）では、「仏の滅後四百年にあたりて健駄羅國の迦式色迦王、仏法を貴み、一夏、僧を供し仏法をとい（問）し（以下略）」と、仏法を外護するのみならず、仏教の教説にも深い関心を寄せていた様子が説かれています。

また、『法蓮鈔』（九四二頁・前出）には、五百人の阿羅漢を集めて『大毘婆沙論』を編纂することを予言したという仏記（釈尊が未来世を予期した言葉）を挙げます。なお、阿育王を仏滅後百年の出世、迦式色迦王を仏滅後四百年の出世とするのは、仏滅年代と両王の治世年代を比定する日蓮聖人の理解と認識を示している点で興味深いところです。

なお、馬鳴の故事について、『報恩抄』（一一九九頁）には「馬鳴菩薩は金錢三億かかわりとなり」との説示が

ありますが、ここには迦式色迦王の名はみえません。

(二) 屹利多王・訖利多王

梵名 *Kṛiā*。屹利多・訖利多などと音写し、漢名を買得と訳します。阿育王の命で伝道師の末田底伽 (*Madhyantika*) がカシミール国に五百の僧院を造立するために買い集めた奴隷集団 (*Kṛiā* ≡ 屹利多) 出身の王の意。カニシカ王の歿後、カシミール国 (*Kashmir*、迦湿弥羅国) を支配し、仏教を弾圧しましたが、トカラ国 (都貨邏国・大夏国) の雪山下王 (後述) によってほどなく破られました (『大唐西域記』)。

日蓮遺文では、破仏法によって国を滅ぼした亡国の悪王として、『行敏訴状御会通』(五〇〇頁) や『神国王御書』(八九一頁) において波瑠璃王や優陀延王 (本誌九八巻一号・同四号参照) に比肩されます。

特に『報恩抄』(一一二四頁) では、

正法を行ずるものを国主あだみ、邪法を行ずる者のかたうどせば、大梵天王・帝釈・日月・四天等、隣国の賢王の身に入りかわりて其の国をせむべしとみゆ。例せば訖利多王を雪山下王のせめ、大族王を幻日王の失ひしがごとし。訖利多王と大族王とは

月氏の仏法を失ひし王ぞかし。漢土にも仏法をほろぼし、王、みな賢王にせめられぬ。

と、誹謗正法の愚王 (訖利多王・大族王) と護持正法の賢王 (雪山下王・幻日王) との対比の中で例示され、謗法の国主が「隣国の賢王」によって滅ぼされた先例として引かれています (大族王・幻日王については次号以降に紹介)。

(三) 雪山下王・●摩咀羅王

トカラ国 (都貨邏国・大夏国) の●摩咀羅王。仏教を破壊した屹利多王を殺害し、仏教を復興させました (『大唐西域記』)。日蓮遺文中では、如上のとおり、『報恩抄』(一一二四頁) において、「隣国の賢王」の一類として引かれております。

たかもり だいじよう (法華会評議員・立正大学非常勤講師)